

2013 年度  
卒業論文・卒業制作集

2014 年 3 月

慶應義塾大学法学部政治学科

塩原良和研究会



## 指導教員より

みなさんと過ごしたゼミでの日々、いろいろなことがありましたね。2年前の春、鶴見国際交流ラウンジで外国につながる中学生たちとの活動を始めた5期生は、秋学期になると急速にまとまってきたように感じました。授業時間外にも継続的にみなさんが続けてきた話し合いの成果だったのでしょうか。4期生のおふたりも含めて、ほんとうにチームワークのよいメンバーだったと思います。

夜教室で中学生たちの学習サポートに取り組み、そして翌年度には高校生居場所づくり活動を発展させていくなかで、みなさんと外国につながる若者たちとがより深い絆で結ばれていくことも感じました。ときには彼・彼女たちの痛みや生きづらさを共有しつつ、しかし安易な同情や感情移入ではなく距離を取るべきところはとって、年下の仲間たちとリスpektしあう。なかなか出来ることではないと思います。このゼミでは多文化共生、承認、対話といった概念を社会的に学んでいます。みなさんの鶴見での実践は、難しい理論書に書かれている抽象的な概念を日常のなかで具体化した姿だったのだと思います。みなさんの活動をラウンジで眺めているとき、僕自身も多くのことを学びました。

鶴見での活動だけではなく、三田の家での活動、文献輪読、そして卒論研究などのさまざまな場面で、みなさんが学び、成長していく様子を頼もしく拝見していました。本書に収められた卒業論文・卒業制作からも、そうしたみなさんの成長の一端が伺えます。

これから社会に出ていくみなさんにとって、論文執筆とは自分の考えを論理的に展開して主張し、相手を説得するための訓練です。そういう能力は、それはそれで大切です。「かたよって」いようが、「空気を読まない」と言われようが、これからもどんどん尖った主張をしてください。

しかし同時に、学術研究は独りで完遂できるものではありません。みなさんの研究の背後には先人たちの無数の研究があり、クラスメートや教員からの助言や批判があり、フィールドで出会った人々からの問いかけがあります。それらとの真摯な応答を通じて、みなさん自身の立論が徐々に輪郭を整えてくる。つまり、学問とは本質的に対話的営みなのです。論文を書くという孤独な作業をつうじて、みなさんは主張や立場を異にする他者との対話の仕方を学んでもいたのだということを、忘れないでください。

怖いのは「かたよること」ではなく「こりかたまること」なのだとは僕は思います。自分の信念がいつの間にか「こりかたまって」いないか絶えず振り返り、他者の痛みにも敏感であり続けながらも、この世の中には正義や公正というものがありうるのだということを決して諦めない、そんな弱くて強い大人になってください。もちろん、僕もがんばります。

それでは、身体にはくれぐれも気をつけてください。どうかお元気で、さようなら。

2014年3月  
慶應義塾大学法学部教授  
塩原良和

## 2013 年度卒業論文・卒業制作一覧

多文化共生社会におけるメディアの役割

安齋 春奈

炎上経験者からみるネット炎上

海老沼蒼生

日本人移住者をめぐる差別と偏見——台湾における日本人移住者を事例に

尾形美帆

多文化化する市民社会における共生——対話と協働の端緒を探る

小沢直史

食分野から考える東日本大震災後のリスク・コミュニケーションの変化

笠間佐和子

日本の難民問題と難民受け入れの可能性

川又 友輔

「ドキュメンタリー」なるものを巡る諸議論の整理

重田 竣平

日本における養子制度からみる日本の家庭代替養育の問題点

宗 香里

「地域の歴史」を越境する——臨海部開発と新しい観光の事例から

堀内 康資

日本における「中絶」と社会環境の変化

水野佑香

地域コミュニティとしての商店街の可能性——西荻窪神明通りの今とこれから

宮廻杏奈

外国にルーツを持つ子供達にとって最適な教室文化・空間とは

山崎杏佐子

記号としての「社会貢献」に関する考察

山本奨

日中国際結婚家庭の育児・教育・言語問題——アイデンティティ形成への影響 中国出身  
の母親との関係から

吉川 春香

家畜の福祉と倫理的消費

吉田万裕

多文化共生に向けた教育の可能性

渡邊祥子

(五十音順)